

津軽三味線の輪を 広げていきます



青木 寅蔵さん
(77歳・東本町1丁目)

津軽三味線は自分を表現できます

最近、若い人の中で太鼓や笛、三味線など和楽器に関心が持たれています。なかでも三味線の人気が高いようで吉田兄弟などが有名です。

そこで今回は、津軽三味線に魅せられ、37歳の時から40年にわたり三味線を続けている青木寅蔵さんを訪ねました。

「父が尺八や笛をやっていたので、子どもの時から楽器が好きでした。JR東北本線に勤めていましたので、青森県に行く機会が多く、何度も行っているうちに津軽三味線が好きになりました。民謡がもともと好きだったこともあったと思います。それからは、どうしても覚えたくて東京で教室を開いていた青森県出身の小山貢翁師匠の所まで20年間通いました。習っている時は辛かったです、師匠に褒められた時はうれしかったですね。」と当時を振

ぶんがくかん発
Vol.158

古河文学散歩

アフガニスタンの少年のものがたり

東京での復興会議も無事終わり、戦乱で荒廃したアフガニスタンも復興の第一歩を踏みだしました。

連日テレビなどでアフガニスタンの報道が行われていましたが、アフガニスタンに住んでいる人が、厳しい自然のなかでどのような生活を営んできたのか、生活の詳しい実態を知るための情報は少なかったように思えます。

アフガニスタンは、険しい山々と乾燥した砂漠に覆われ、国の大半が荒地というアジアの国々の中で最も貧しい国のひとつとされています。

しかしながら、古くからこの国はシルクロードの中心地として、東西文明交流の重要な役割を担ってきました。そのためいろいろな民族が住んでおり、なかには日本人そっくりの人々にも出会うことがあるそうです。

古河市在住の児童文学者金田卓也氏は、19歳の時に初めてアフガニスタンを訪れ、人間の生きる厳しさと優しさを教えられたといいます。その後もこの国をたびたび訪れ、1981年アフガンの難民キャンプを訪れた体験をもとに、絵本「アブドルのぼうけん」を製作、

翌年出版しました。

絵本の内容は、アフガニスタンの少年アブドルとアーマッドの兄弟がふたりで砂漠を越えて冒険の旅に出る物語です。

金田氏は絵本について次のように語っています。「この話は、創作というより、現実にアフガニスタン

で出会った子供たちのエピソードをもとにした半ドキュメント絵本と考えてもらってもよいと思います。外国における奇妙な日本紹介のような単なるエキゾチシズムに陥らぬよう、アフガニスタンの文化を研究し、家の内部から服装のデザインにいたるまでディテールに気を配りました。製作の途中で、実際にアフガン人にもチェックしてもらいましたし、アフガニスタンの子どもが見ても奇異にうつらず、

十分に楽しめるものにしたつもりです。」

文学館では、テーマ展「アフガニスタンの少年のものがたり 金田卓也絵本原画展」を7月27日(土)から9月1日(日)まで開催いたします。期間中に記念行事として、アフガニスタンにまつわる講演会を企画しています。ご家族での来館をお待ちしています。



「アブドルのぼうけん」偕成社刊